

## 概 要

思春期の小児がん長期生存者は、多くのストレスを経験しているにもかかわらず、健康な社会生活を送り弾力性（レジリアンス）が高いことも報告されている。この研究の目的は、入院中に高められたレジリアンスが長期生存者ではどのように変化するのか、その要因とプロセスを探究し、それを基に、思春期の小児がん患者と長期生存者が社会復帰するための、ネットワーク作りの支援を構築することであった。

研究方法は、前回の研究「思春期にある小児がん患者の弾力性（レジリアンス）を高める要因である精神的な強さ」と同様にケーススタディーで行い、調査方法は半構成的面接法を使用し、面接データはパターン適合の方法で解析した。パターンには Self-Sustaining Process（自己を激励するプロセス）のモデルを用いた。対象者は12～24歳までの、小児がんで入院治療の経験があり退院後1年以上フォローされている長期生存者7人と、その母親であった。母親には長期生存者と同様に、簡易性日本語版自己概念用紙とソーシャルネットワークマップで調査を行った。

前回の調査では、レジリアンスの高め方は初発者と再発者との間で相違が見られた。初発者は、復学するという目的を持ち勉強し始めたのは退院が決定したころであった。初体験でもあり入院中は治療に専念していたためだと考えられる。再発者は過去に経験があるためか、入院の早い時期に復学することを目的とし勉強に取り組んでいた。また入院してからも病名を告知している親友や学友と交流するなど、入院前の社会生活を維持していた。

今回の調査では、友達に自分から告知することがレジリアンスを高める要因の一つと考えられる。告知することについては初発者と再発経験者で相違は見られなかったが、告知する目的については相違があった。初発者は友達との交流を持つためであり、そのために学力を取り戻すことや体力の回復を願っていた。後者は友達から自分のことをよく理解してもらうためであり、また将来、人のためになることを目標としていた。この研究は、対象者数が少なく妥当性を高めるために追加調査が必要である。

小児がん患者や長期生存者が、入院生活から復学という社会復帰をするために、自分から友達へ告知することが大切であると考えられる。医療関係者・家族・教師はこのことを理解することが重要である。また患者や長期生存者のために、告知できるような勇気づけや告知できるような環境を整えることはもちろん、親が病気の子どもへ告知する勇気を得るための支援も必要である。これらの支援が患者や長期生存者のレジリアンスをより高め、生活の質を向上させることができると考えられる。